

＜英国棧橋調査の余録＞ 湖水地方(ウィンダミア湖、カッスルリッジ、ホークスヘッド)
2105年調査 (執筆担当 布施谷 寛)

イングランド南部から中部のなだらかな地形とは趣が異なり、湖水地方は山が連なり、氷河で形成された谷間に湖沼が連なる自然景観は、イギリス人にも愛されてきました。「ピーターラビット」の作者であるベアトリクス・ポターもこの地を愛し、作品には湖水地方の



自然が色濃く滲んでいます。また、ポターは湖水地方のトラスト運動を先導する役割を果たしたことで知られ、印税収入の大部分を農家や旧貴族などが売りに出している大規模な土地の購入にあて、4000エーカーの土地を National Trust に寄贈しています。現在は外国からの観光客も多いが、お目当ての大自然が残されている理由の一つが、このトラストによる開発のコントロール効果による面が大きいことに、改めて英国の懐の深さに感心させられます。



ウィンダミア湖の西にあるホークスヘッドは白壁が印象的な小さな観光地で、上流階層の家族が郊外から馬で街中にやってくるような英国の典型的な地方です。観光の目玉はポター一色で、ポター記念館で原画を10枚ほど展示していました。ポターの動物擬人化には湖水地方の自然というイメージとはそぐわない若干グロテスクな違和感がありますが、釣りをしている Geremy Fisher (図は PublicDomain となっている絵本—Project Gutenberg—より転載、元画はもっとしっかりしたタッチで色合いも青系でしっとりしていました) というドジな役回りの蛙の背中には何ともいえない哀愁があり、ポターが実際に目にしていた動物たちをまったく人と同じように見ていたらしい、ということを感じました。



ウィンダミア湖の北半分を南下するアンブルサイドからボウネスまでの湖上のクルーズは船の屋上に陣取ったので、夕方になり少々寒さがきつかったのですが、気持ちよい時間でした。確かに周辺は自然が多く残り、マリーナなども島陰を利用して景観にも相当厳しく配慮しているようでした。



湖水地方は湖以外でも魅力がいっぱいで、カッスルリッジ・ストーンサークルは、勝手に入れるし、有名なストーンヘッジよりは随分と小振りです。このくらいの石ならごろごろと転がして持ってくる事ができるのでは、という話も出ていましたが、周囲は山に囲まれ、パワースポットとしての力はより強く感じられました。難点は大型バスの駐車場がなく、結構な坂道を歩いて往復せざるを得なかったことでした。



なお、イギリスのドライバーの技量の高さには毎回感心してしまいます。ウィンダムミア湖の西側の道は狭く曲がっており、ここは広い方ですが両側から石の塀が迫っており、ベンツの大型バスと乗り合いバスがすれ違う様は神業に思えます。思いのままに馬を操る騎士の伝統がある、という解説もあり

ましたが、その騎士にあたるドライバーという職種の体型の類似にはまったく別の意味で驚嘆せざるを得ませんでした（写真の縦横比は変更なし、右のネクタイをしているのが我が団のドライバー、左は隣に駐車していた観光バスのドライバー、そのメカニズムについては残念ながら未解明です）。

<完>

